



安方忠義傳

前編四冊

卷之一

安方忠義傳
前編四冊

卷之一

89
遠 13
1305
1



東都 醒醒齋京傳著
一陽齋豊國畫

前編

うとふ

安方

忠義傳

門へ 13 特
番 1305
巻 15

明治三十九年一月二十九日
水谷弓彦氏寄贈

浪華書林

群鳳堂
群玉堂
合梓

驚かすはあつたての事をおし
 一いつうううううのちをちをすいせ
 まへにううううのこをううううを
 おほううううううううううううう
 おうううううううううううううう
 いこのうううううううううううう
 うううううううううううううう
 同ううううううううううううう

浪華書林

ぶきり〜しめるよ衆造る〜
 て月こひまふ〜
 らんれ〜
 何〜
 も〜
 いな〜
 む何ひう〜

儂安塞洗
 心



おのれ陸奥人の口此碑丹珠をたふ
 古事と同がま〜。十符の菅薦
 七らだ〜
 一〜
 物語文〜
 武隈川のうめれ木〜。錦木乃
 多〜

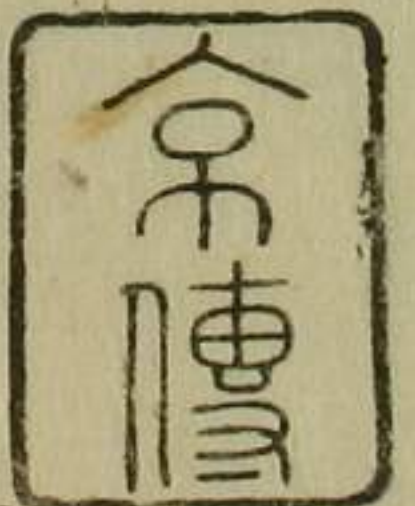
言知事一
一むらう。無古曾園のきくら木
みまらうて。毒みおさるはよ。や。壺の
碑かたつ。あちがちみむ。
この前みあはせる。安積沼の花
かづも。かつるる人のおやう。とを。
まもみづ子花咲さるひをえむ
それさるらう。そのあれ
か。ま。れ。袂布の布をぬけむ。あ
いぬ人。い。れ。む。あ。い。ち。う。け。れ。が。
あ。ま。い。筆さるて。平の良門のあ
よ。と。ま。い。へ。善。知。鳥。の。考。を。く。ら。へ

古書がもと引りあつ。山井の
あ。く。む。ひ。と。あ。ら。し。て。ま。の。ぶ。文。字。
さ。ら。ま。み。づ。れ。た。る。を。た。し。緒。絶。
檣のたえ間をおさるひて。ほひみ
いつの巻のあ。ぬ。ら。れ。あ。む。む。と
あ。ら。の。こ。と。を。の。露。む。ら。あ。ら。を。
た。秘。と。て。ほ。ら。さ。ま。う。け。た。る。書。
あ。あ。れ。が。武。隈。の。松。れ。跡。を。こ
このみねあ。ま。ふ。と。れ。を。あ。れ
あ。ら。と。ま。ら。あ。れ。ど。何。た。を。懲。
う。と。と。と。勸。る。あ。と。と。う。み。た。が。ら。ら

善口

コレ三

のく。せらんとてよ〜あまづめれ
かこぎぬのほ〜まけ〜詞のゆ〜げ
るる。俳優風のちり〜こ見ゆ〜
たあひぬ。〜やびたる書み〜
〜わづらひら。〜とま〜ひめ〜
時の文化の二を〜。神無月つ
なちの日。ちりひひまげ〜梢を〜
鴨鼠の翁醒〜齋〜書よ〜空み
かこ〜ま〜つげ



○善知鳥考證

秘藏抄

善知鳥考證
すのこ〜の〜ひま〜
かこ〜を〜よ〜

業平

は〜を〜下流男を〜。ま〜
る〜れ〜の子を〜。ば〜
を〜て子をと〜。その子を人の取み行〜
だ〜ら〜ら〜ふれて〜。む〜。さ〜
世〜み子をと〜。以上

甘露塩草

そのの瀆
子〜の雨の笠の〜
〜人〜

太神宮へ

勅使下り〜。こ〜
み〜。神供小奉る〜也。此鳥〜
破の中〜子と生〜。母鳥の〜
〜と〜ひ〜出る〜。取〜。其時母鳥空〜
〜

ほきてあつたてあつた涙の雨のおとくみ血とてふるあひび。それ泪かつて
牙そんごるゆゑみ葉せとさきさきりふ以上

奥羽觀跡聞老志 三之卷曰。安方鳥。方或写。或号ニ善知鳥。

相傳是所産干外濱也。近來春夏之交商人賣之其

大似小鳧而通形淡黑。長首尖嘴。脚共黄色。但自

額下至下腹純白。商人曰之善知鳥。食之則有脂甚

美。其好味不減。緑頭鴨云々

愚案。善知鳥。親ハかぐととれと。子ハやととと答けり。親ハ空母と血の泪
をふせぬれととを養ふ。ちとほくまの藻藍草の説みとんき。飛鳥の子とあふ
人みおとらるご殺生のむくのともやまを理を示したるものさるべし。業平の歌み泪と赤
くおとととまもとあれは。ばもの血のさるさるをさるとらんと。あつたひひんごさる

考證終

○善知鳥寫生圖

和漢三才圖會云。紫善知鳥。鷗之屬。形色似鷗。而嘴黃。未勾脚。淡赤色。奥州平土濱有之。特津輕安瀨浦邊多云々。醒々衆小同各小圖を
出して白き鳥也。かめ小似つりと云ハ誤まり今其寫生を得て
摸出ぬ



將軍太郎平良門

稚りて強氣力量震ふ越山獸と

追て弓矢箭をくらふと

牧馬成馳て御術と

まふ



肉芝仙の悪意をつらふと
渡辺源次編生補る

將軍息女滝夜刃姫

良門之婿也

始菩提の

道小入て

如月尼と稱

後俗に改して悪意小変と

國色仙姿その志は強大猛りて

列漢の膽氣ふもまきとらひひ

頼光頼信の武徳ふよりてやろがぬ



善知安方

將軍の臣六郎

公連の子まり

父諫死

の後

陸奥小

ささくへ

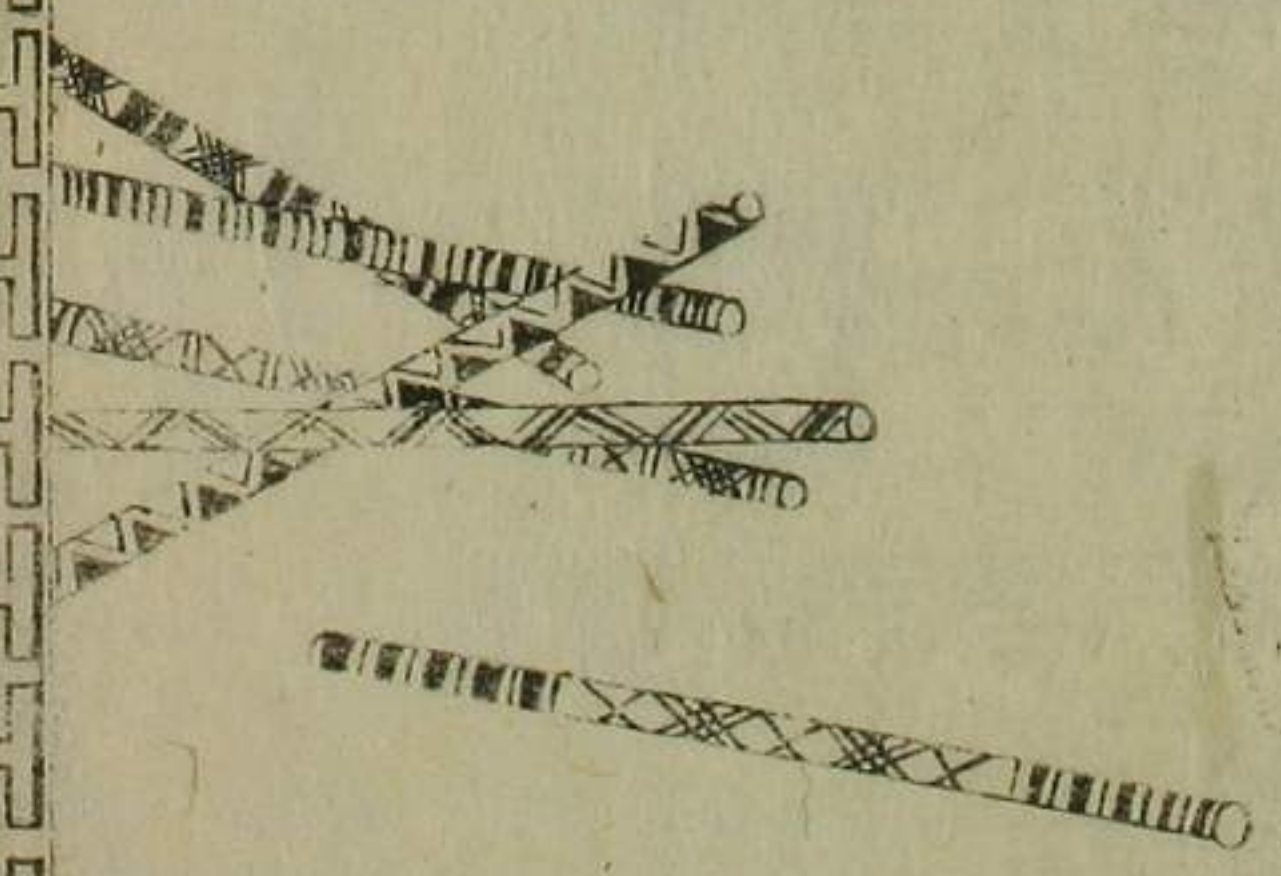
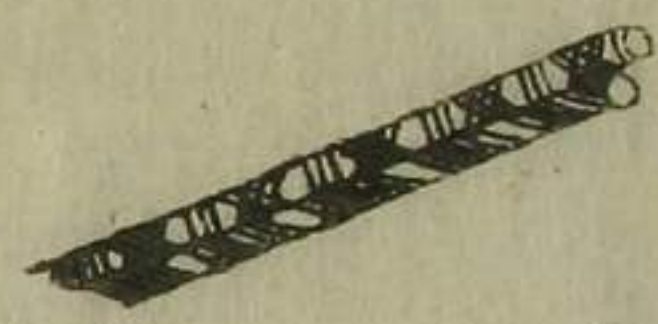
外濱の

獵師とて良門を

諫て自殺し魂鳥と化す

なほいさめ成すぞ忠義比類は

化すも怨の鳥を世に善知鳥とす



善知妻錦水

貧をものび苦なうも細布を織て一子を養

悪祝の為ふ慮もつれ活地獄の

責をうけて擇成やうぞつひふ

自殺し魂鳥と化して夫の

死路をよぐぬ一生の真心

たぐひは



○片輪車怪



暗夜街とあがり
鮮血をこぼし懸ねのほをばしらを
小兒をとりて
来去の所とあらむ

○藤六左近女唐衣

大宅光國が
毒をり



顔の花の
ふくみして肌
聖ふたごひをば薄命ありて種これ
災を累とひへども孝貞の功德ありて
逆ふ天日乃 時を得て
次ふありて大宅太郎光國古御所の
妖怪をあらむる圖あり餘紙をとりて
よりくそのゆゑに記す

純友の腹心より
 相見兇悪
 身長七尺小
 過力量
 千介
 成奉
 黒崎
 宰府の
 両戦小武
 勇たのへと純友六二後越中立山小
 かつひふ七十餘歳をて戮せしれ

○西海賊首伊賀壽太郎



矢巻

五

七慰るのまられ画人の意を枉しめ 今様
しきうちもたぬく古ふわらうもの
さるるのけしき画風をいつちきしむ

或退治物 昭繪 詞書八兼好 繪ハ土佐長隆ト云傳

○ 法然ニ人行状繪卷物 後伏見帝ノ勅ヨリキ 正安ノ頃修造スト云

○ 百鬼夜行圖

○ 蘭人解體圖

○ 土佐光信變化圖 春上翁画巧潑畫見ニ 出ス

善知安方忠義傳前編總目錄

みちのくふ名たる地名とりて條々の字號とてかゝるども 本文み合ふるみあはせ

卷之一

索規瀆 第一條

将門逆心公連 諫死の事 善知二郎零落の事 武藏五郎打死の事

信夫山 第二條

将門息女如月尼の事 平太郎生立強氣の事 善知安方疎立平太郎を尋る事

白川關 第三條

平太郎筑波山み登て肉芝仙みあひ蝦蟇の術

を授り非望を企る事

安積山 第四條

如月尼平太郎が悪企みくみたる事善知安方諫死の事

○卷之二

宮城野 第五條

鷲沼太郎則友回国修行の事越中立山現在地獄の事

狭布里 第六條

善知一子千代童孝行の事医師老熊非道を行事

十符里 第七條

善知夫婦の魂魄鳥と化と事安方村善知坂の事

○卷之三 上册

名取川 第八條

源頼信嫡酒み耽り藤六左近を手打の事藤六俳

諧体の歌み堪能の事

盤提山 第九條

一条棧敷屋の鬼片輪車の事藤六が妻鬼み子をさる事

荒野牧 第十條

大宅太郎光国志賀の山越して賊婆みあふ事医師老熊

唐衣を奪事

○卷之三 下册

無古曾關 第十一條

大宅光雅遺言陰の太刀の来由如月尼百日無言の苦行

を修する事

下 綱 關

第十二條

如月尼羽太九四郎を殺て唐衣を奪事荒猪丸雪夜勇戦の事

○ 卷之四

起 居 里

第十三條

大宅光国旅路み赴事良門蚺蛇の外天を見て志を励事善知夫婦の亡魂良門を諫る事

阿 武 隈 川

第十四條

良門併みおちて賊寨みいごと伊賀寿太郎みあ事太郎九州軍物語の事

松 島

第十五條

伊賀寿太郎良門が味方み属事良門権み寨主事將軍太郎と名告事

衣 衣 山

第十六條

柴刈男相馬古戦の物語の事大宅光国舊内裏変化をみる事

○ 卷之五

霞 谷

第十七條

遊仙窟の管絃勇士をみる事荒猪丸が一箭光国を伏せる事

以 為 橋

第十八條

滝夜刃姫奮内裏み花の宴を催し事光国詩を吟じて
宴席み召ろ事

緒絶橋 第十九條

官兵奮内裏とろり困て滝夜刃姫を亡し事源頼信
光国み賞を賜事

小鶴池 第二十條

將軍太郎良門術を施して蝦蟇の鬪をさそしむ事
善知夫婦の亡魂再良門を諫事

以上前編目録終

善知安方忠義傳前編卷之一

江戸 山東京傳著

索規の瀆 第一條

爰人王六十一代朱雀帝の御宇小のりて相馬小次郎平将門ハ其
為人狼戾めし礼法小拘ど非望を謀て朝家を傾推て帝位小登ん
中りひ立承平二年下総國石井郷小都を建新小大内裏瓜造營
して二十二の門七十二の前殿三十六の後宮金銀を鑄め珠玉瓜
饒つたられハ其費つたつくと云つたをつたをつた則つた自平親王又新皇帝と
号し百官を備衆職を置大臣納言八座七辨文武の両官省百官
尽く點定し其闕つたハ唯曆博士つたあり然る小将門の家臣

六郎公連とひ者主君叛逆の評議をす。大に嘆て和漢の先蹤を引詞
 を尽し理を糾し。めまうしび諫言せしむも。将門少しも用されば。龍逢
 比干が諫て死せし例ふかき。腹かきさふいて死し。将門これと憤。
 公連が家を没収し。一子次郎安方を捕て。國の境を追拂ふ。かくて次郎
 安方へ父が非命の死を悲しむ。その自殺せんことを。妻錦木申りく。さめ
 夫婦とり下総を追拂き。奥州外濱ふくろて。つづの住家瓜のふか本名
 をうじて善知と名告る。ありふととて。三葉もみけの夏海ふさまざり。
 冬山小かりうじて。不さ煙をよそ。夫婦申りく。露命をぞはるたけ。
 去程小将門の目を追て。猛威をふるふ。關八州を打すひけ。己小都小政
 のやんと議し。たるふど。中々都ふさこえ。上平太貞盛打手をこひうけ。
 田原藤太秀郷と合体し。将門とあひく。合戦ふど。おとびく。さそて

善知安方外濱小住。夢の間。春秋九年をこら。天慶三年小
 つし。頃日街の嶺をさけ。貞盛秀郷大軍をりて。将門を攻。己小
 今合戦真寂中。将門敗軍。及ふよ。を語け。罰せられ。男
 ぬあうも。ささぐ。忠士の心。主君の牙の土氣づり。二つあち。男
 鷲沼庄司光則。将門の家臣。安否をもまうし。毒錦木も。父光則り
 打死りや。と。大うさる。と。安方俄小ひ立。さる。ふ。を
 下総の國をこら。旅立ち。かくて。急を。不。ふ。
 日。将門のたて。嶋廣山の麓。小は。此時は。天慶
 三年二月十四日の雞鳴の頃。朝霧。た。四方。四方。朦朧。さ。り。く
 の。さ。権。休。て。様子。を。窺。る。ふ。忽。四方。小。貝。鎧。の。声。大。小。起。る。
 数万騎の鯢波箭叫の音。天地も崩。その。合戦。さ。り。く

くるり。かゝり。小社の裏小戸をひそめて。ふん様子。をうらむ。ひくる。霧
 のまがたふ。つんくの旗。翻翻。して。雲より。おつる。花の波霞。ふ。うらむ。ひ
 出来る。安方。さ。とも。わ。じ。や。と。ひ。つ。武者の。打。扮。を。うらむ。白。星。乃
 曹。小。赤。糸。の。腹。巻。を。て。青。純。の。大。口。を。と。ら。宿。鴉。毛。の。馬。小。金。身。の。鞍。を
 お。ま。て。穿。る。が。の。ま。と。手。を。負。し。と。見。え。て。總。身。朱。小。澤。の。息。も。た。ゆ。げ
 あり。後。を。顧。つ。手。綱。を。ひ。ぐ。り。こ。る。この。松。後。小。馬。を。と。め。て。て。体。ひ
 ける。か。る。所。小。百。騎。の。の。敵。兵。お。め。れ。さ。り。ひ。を。跡。を。追。来。さ。る。が。か。の
 武者の。手段。さ。や。こ。り。ん。近。く。進。を。遠。巻。ふ。さ。り。か。こ。し。て。を。攻。め。り
 ける。か。の。武者。これ。を。吃。と。ん。て。運。命。も。これ。も。と。や。と。ひ。く。ん。笠。符。ひ。さ
 う。ら。ぐ。り。弓。胡。蘇。を。か。く。手。と。投。捨。大。童。ふ。あり。大。太。刀。と。曹。の。真。願。小。は。

か。ぎ。三。方。へ。追。捲。り。八。面。小。切。て。ま。ら。り。ひ。く。者。を。六。拜。に。打。立。破。母。衣。付
 車。切。が。衣。裳。小。忽。て。左。右。小。さ。さ。い。く。せ。諸。膝。雜。て。の。う。け。ふ。く。こ。せ。時。の。間
 小。二。十。四。五。騎。切。て。お。じ。三。十。餘。騎。小。手。を。負。せ。り。ん。は。始。る。兵。共。さ。り。ん。の
 て。風。小。木。の。葉。の。散。ぶ。く。四。方。小。乱。く。逃。去。り。り。げ。小。目。冷。く。と。見。え
 くり。々。か。の。武者。勝。小。手。を。て。これ。を。追。打。んと。せ。所。小。山。の。う。へ。へ。り
 雨。の。ど。く。小。遠。矢。を。射。う。け。系。る。馬。の。平。頭。太。腹。五。六。所。射。は。ま。あ
 たり。ハ。小。膝。を。折。て。腫。と。倒。る。か。の。武者。の。身。小。ら。所。の。矢。八。数。か。し。ご。ぞ
 兼。毛。の。こ。と。く。折。う。け。射。を。く。め。ら。れ。て。大。太。刀。が。こ。り。し。ま。ふ。つ。さ。こ
 ち。ま。さ。く。立。て。あり。る。が。甲。を。尻。居。小。倒。たり。安。方。ハ。社。の。う。ら。み。あり
 戦。の。始。終。を。て。て。花。や。る。る。合。戦。を。る。り。の。哉。天。晴。の。勇。士。ど。と
 感。歎。し。さ。さ。や。ど。笠。符。を。さ。り。ふ。一。定。御。内。小。お。か。を。名。の。人。さ。る。べ



相馬内裏
兵火か
不ろふ

相馬内裏

四



武藏五郎
おん善知
安方八郎
五郎が
なぐしの毒
弁死を
自宮

武藏五郎

せめての敵、首をたらしせどと名ひつ。立寄て抱かじ。乱れる髪をかきわけて
 て首をよくり見れば、かみく見知りたる者あり。世ふるびなき美少年
 まれば、えいぶくもあしむ。いまど少の息のきばいそふく耳ふたさ。
 おんちの武藏権守興世殿の子息、武蔵五郎貞世殿のあしむや、かく
 して某ハ六郎公連が一子次郎安方ふてゆがや。氣をほふりられよ。
 いひかくこのあまふ。ごごく某小告りしよとよむりりけし。ハ年負
 ずりく眼をむくこと。安方が教をつりくとうらまめり。これ一げふ
 打よと苦一げ小息をつさていひくる。奇しや安方殿。さひがけど今
 ねあひのひ一ど幸ある。りや南家の連合も今日限あり。夫ははききて
 ねあふたのこかく本あり。主君将門公の妾街流をすりし。ハ昨夜
 いそふ親里ハかごうつはつるが。左孕とけられ。一定御男子御誕生

あはれとちひひさり。然とさな後日朝敵の胤ありとて。さじ出され罰せしむ
 ちりて。ごごく悲しめり。さや。去り比伊豫國純友殿の腹心。これ
 海賊の首長伊賀壽太郎と云者。棄取て主君ふかり。大政官の印
 陳中ふて某のけむひ。今則此ふあり。これを和殿ふふ。ハの御誕生
 の若君生立あり。和殿此印とふさへて京都ふより。朝廷ふさげ。それ
 と切小若君の御命を乞。剃髪をともめけし。主君并御一門の菩提
 ととひむふ。さふさふひむりれ。然とさな一生を無事ふさふ。と
 つひて。鐘の引合より。錦の眼紗ふ色。官印を取出し。ハ重のひる
 い。これ私事ふて語らむ。ごごくけきとついでふたの。ハさき某かひて
 つひむぐの女あり。上野國沼田庄玉村に某の娘ふて。今幸嶋の陳中
 かめり。某打死とて。突ハ一定嘆らふ。ハ。いと和殿かれふひむ。

けり紙とわらふあへりれはこそ涙しけし。安方これをひりたるふ。
今日の打死かひての覚悟とええて一音の辞世をうたけけつ

敵をあと敵としか秘て思ひけん君が情を我仇あして

と心中の愁緒を述べて一命終るまのまでも。主君とかりし忠志の体一首

のうらふわづれていとも哀ふおぼえたり。安方涙をおさうし。おん身の

遺言のりく。まらけね某一命のうへても。若君の清身のうへを安んじ

べ。此官印いたし。ふめづりやせし。けり紙もかの婦人ふあひと

あふ涙し。最期の体もさうりりのがらるべし。心残りぞ成仏のれといひ

けし。武彦五郎。それすてあつたも心残りいれど。今唯主君の死

出のさ死うけせんことを望む所なれど。西ふむひて合掌し。念佛数遍

とあへり。漸く小声なり。懐しべし。生年十九歳を一期らして。草葉

の毛と消失ぬ。安方あり。屍ふむひ。のりき若者を嗚呼惜む

べし。悲むべし。南無幽霊頼護菩提。まむらむらとさあふ所も。

色よれ小袖まらる十五六歳の暴女。裾うげ素足む。息もつきあへど

走りつき。安方おの目もうけど。武彦五郎が屍ふらうりとも。声もさうし。

あれたけびさりし絶入べき形勢かり。安方それと心つき。婦人へ上野國

沼田庄玉村氏の息女あめとさつと。かの美女あり。涙をのびひ。

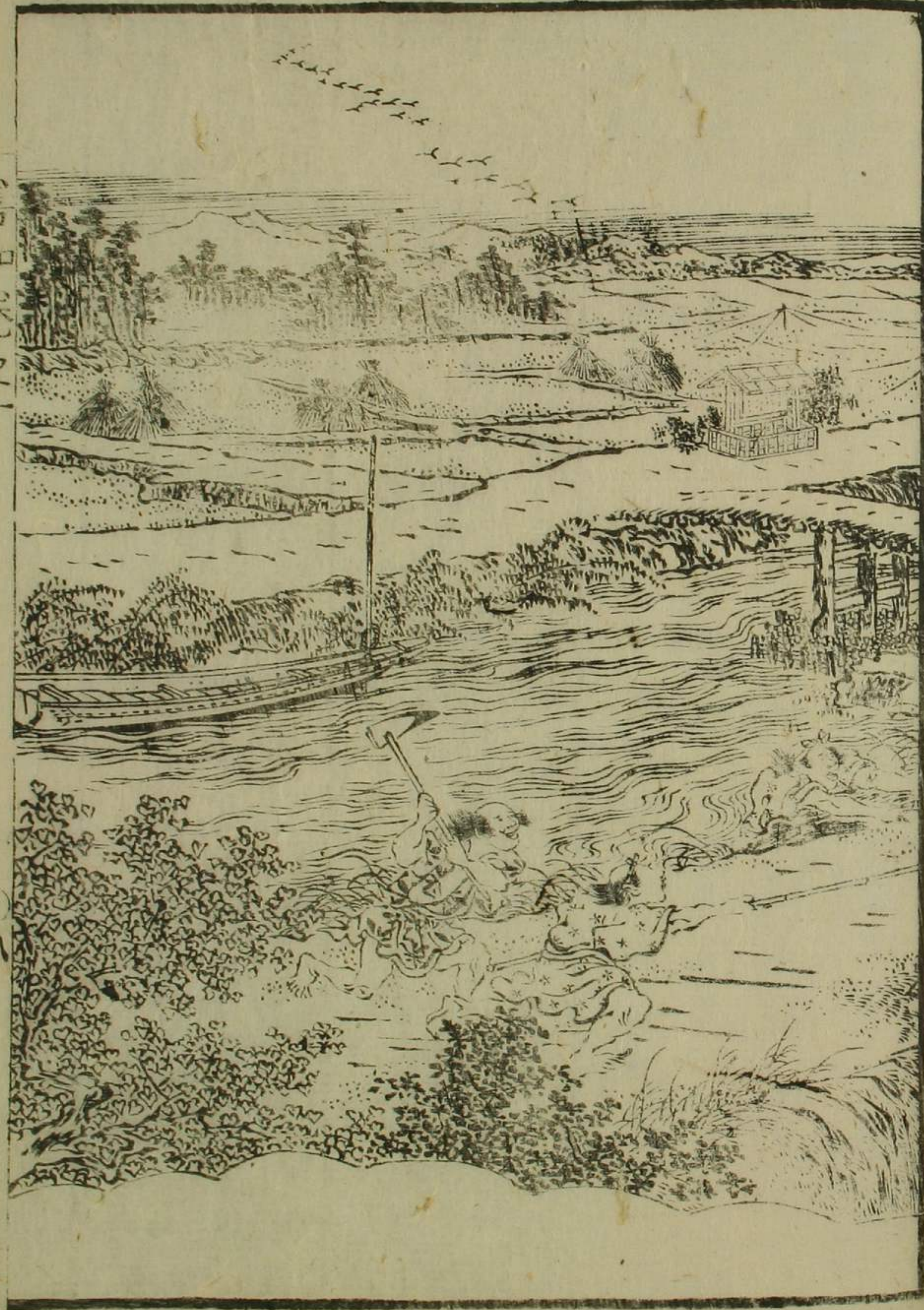
いふも。妾はその老あてぬ。さうのさあおん身のけりや。安方い。

某の相馬の御内ふおいて。六郎公連といひ。老の一子次郎安方と

いふ。ああり。さうのさあ。公連殿の子息や。妾は此身世殿といひ

あつけの女らうが。将門君下野國を打るびけ。上野國高木山お陣

取し。むひし。時陳中の徒然お。あやの美女をり。あめ入りの侍つき。



うぢう
 やまを
 安方を
 相馬の
 かちうと
 兄とど
 土民とも
 賞銀を
 得と
 ちりかこむ
 安方
 打散
 古郷
 へる

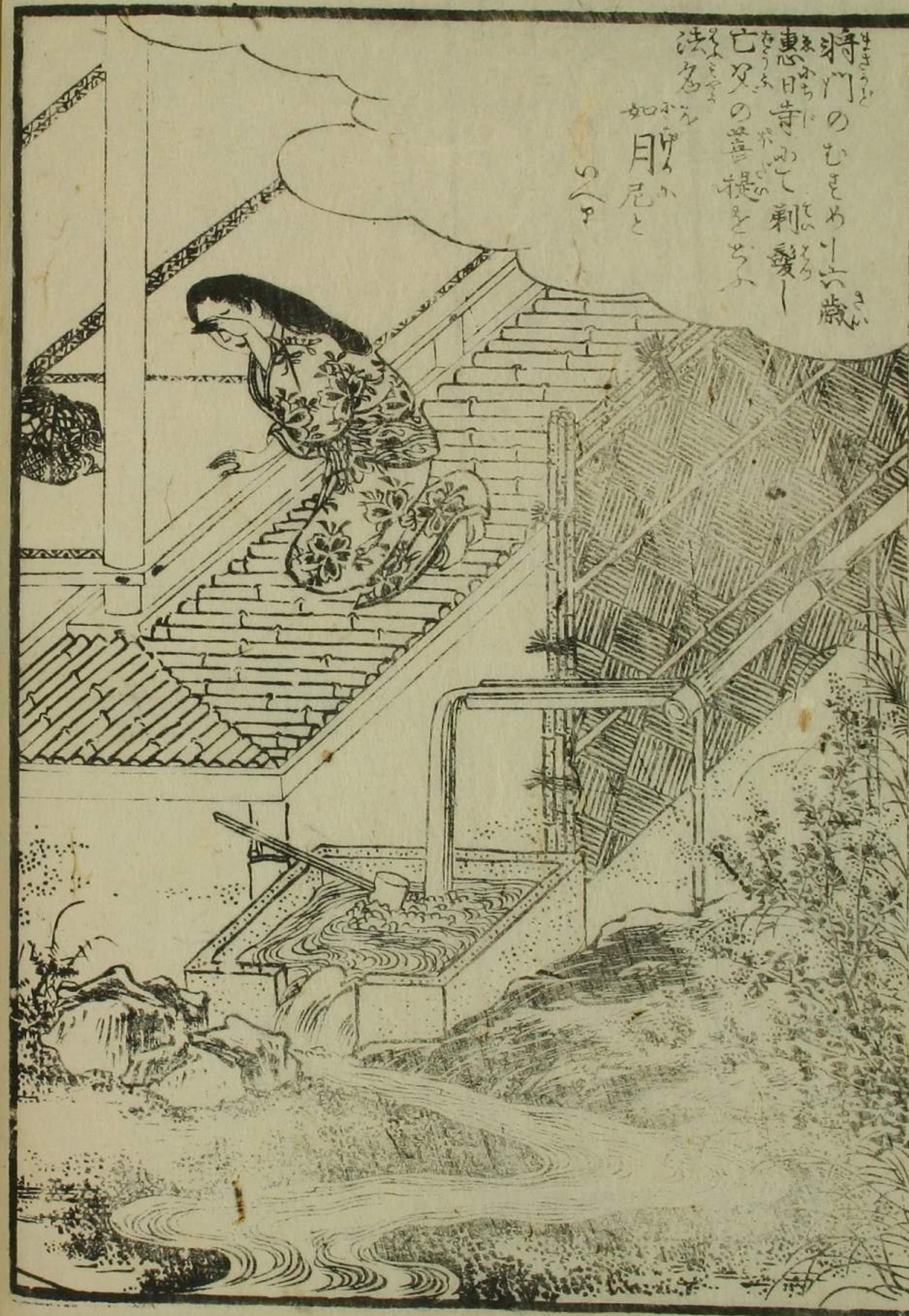
善矢巻之

ゆふ天罰のひるが。つらつきゆめあり。某貧苦ふせまり。刃うち
瘦わたり。力量減じ。つらとつら。討せしむる身あはれ。花ぐり。死
軍して。真途の侍供せんぬを。口惜き。刃のうへやとひとり。どいつ。
奉成ふ。さう。齒が。かゝる。足つ。まだ。のび。わ。る。新内裏の方を
あふ。き。て。悲嘆の。涙。む。せ。る。か。嗚呼。い。ぬ。れ。も。か。く。こ。り。こ。こ。
あり。かく。戰場。迷。居。て。り。敵兵。捕。ま。へ。貞世。が。遺言。も。水。の。泡。
なり。と。り。立。去。ん。と。ふ。う。ま。づ。き。二。人。が。首。を。打。お。じ。此。世。の。緑。は。浅。く
と。も。来。世。の。あ。が。夫婦。と。れ。と。二。の。首。の。髻。を。く。く。合。せ。て。あ。り。り。ら
流。田。の。押。し。け。る。が。又。敵。兵。の。お。め。れ。さ。け。ふ。声。き。こ。え。た。れ。へ。見。と。か。ち
られ。と。蕪。打。つ。け。笠。打。ま。て。ま。の。び。や。う。立。去。り。其。跡。へ。敵。兵。の。ま。ま。こ
弛。來。る。戦。死。の。屍。と。あ。り。と。え。く。武。尾。五。郎。が。首。を。と。り。んと。尋。け。る。が

首のこゝ 軀とえつ。さ。と。へ。首。盜。人。あり。と。中。へ。奪。ひ。去。り。大。骨。折。て。鷹
ふ。ら。と。し。く。ら。と。さ。う。と。は。な。ま。さ。ら。う。立。お。り。ね。後。利。根。平。八。と。い。ふ
も。貞。世。が。首。と。田。の。中。より。見。け。り。出。して。大。將。の。実。檢。お。と。ま。け。り。と。ぞ。押
女。方。の。か。の。所。を。ち。去。り。と。ぞ。往。來。の。旅。人。の。か。る。と。や。將。門。の。貞。盛。が。矢
ふ。の。こ。り。て。亡。一。門。類。族。只。く。う。れ。鷲。沼。庄。司。も。打。死。せ。と。す。又。今。更。の
や。う。と。悲。し。旅。衣。の。袖。を。ち。ぢ。り。つ。た。ど。り。と。赤。と。け。り。が。夜。ふ。入。り。て
乃。瓜。踏。違。わ。ぬ。方。小。迷。ひ。行。ぬ。然。る。ふ。高。所。の。百。姓。等。見。怪。め。て。相。馬。の
落。人。お。ま。さ。ざ。れ。の。へ。う。と。ぞ。と。て。二。三。十。人。追。取。廻。し。本。名。と。名。出。向。くと
攻。め。り。り。り。安。方。や。け。り。の。旁。を。さ。る。ふ。ま。づ。て。兩。眼。わ。り。あ。ら。う。何。を。こ。ん。て
某。を。落。人。と。い。ふ。ひ。あ。や。打。扮。を。ま。て。も。知。り。ぬ。へ。某。の。遠。國。の。旅
人。なり。と。や。り。あ。ひ。ひ。と。こ。と。通。し。と。い。ふ。百。姓。等。こ。れ。を。ま。て。呵。く。と

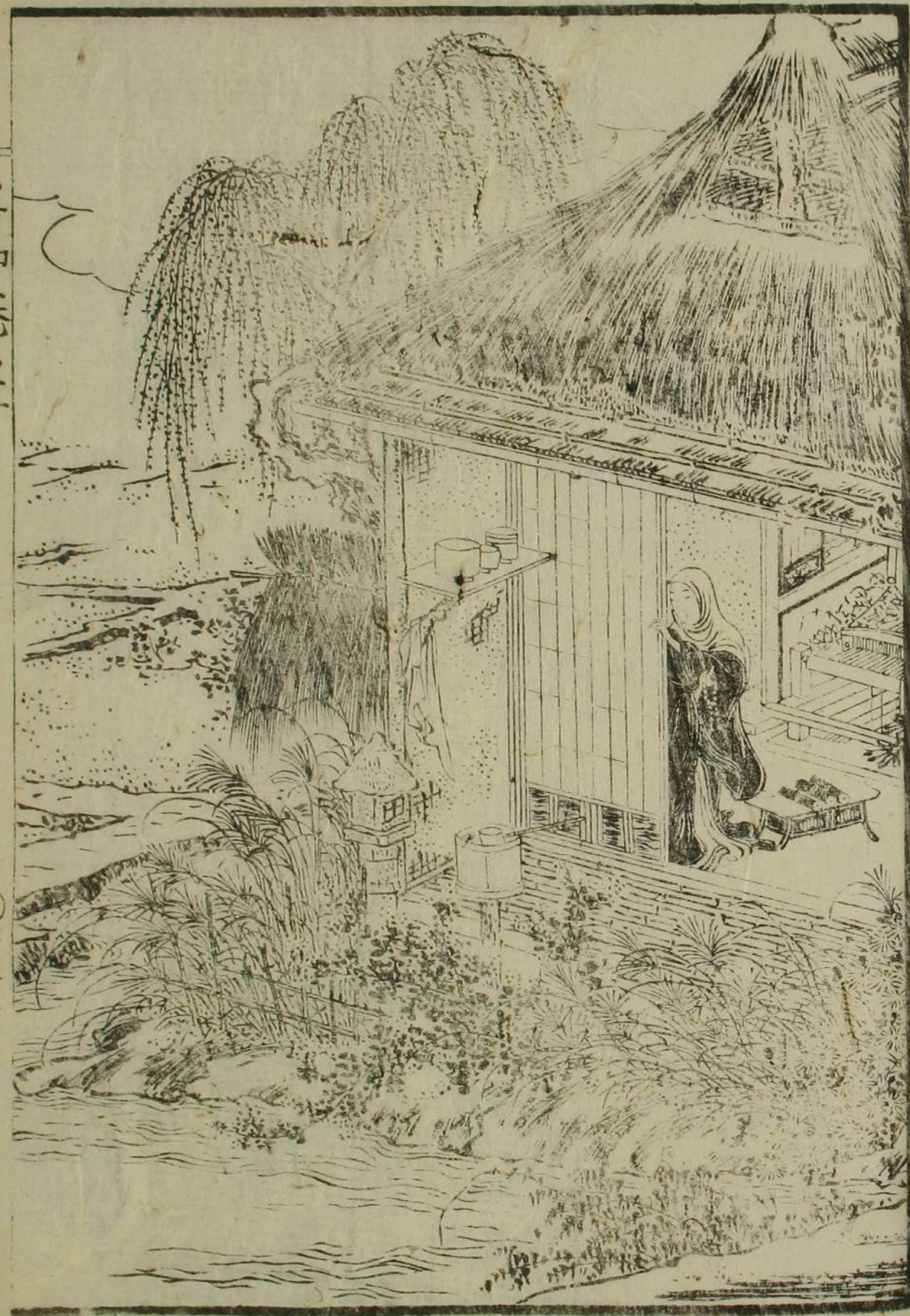
打突。汝輩笠小牙をかりとつて。いさ。我輩の眼を奪ふや先
 にも土総の國伊北伊南の在廳。汝が牙を捨てる。落人を捕へ
 打擲して。せえ。生小者。一掃。不棄て。将来。大将の實檢。小倫へ
 たる。小。大逆の張本。武藏權守。真世とやん。つゝ。去あり。とて。莫大の賞
 銀。とる。つりね。我輩。それ。うら。や。ほ。ふ。細。を。と。り。て。よ。死
 真。と。ま。つ。折。ある。小。汝。よ。も。来。り。ね。と。り。み。その。ま。を。ま。つ。り。安。方
 大。小。歎。息。一。子。の。身。世。は。花。ぐ。き。軍。と。打。死。し。る。小。親。の。真。世。と
 逃。か。さ。して。土。民。の。手。小。捕。ま。さ。し。め。を。う。ら。ぬ。わ。い。は。ま。さ。よ。と。心。中。小
 悲。し。打。た。れ。れ。る。休。ま。り。て。百。姓。の。口。を。そ。ら。へ。汝。も。一。定。猿。公。家。原
 の。う。ら。ふ。か。い。て。名。わ。る。者。な。ら。べ。い。汝。等。年。來。横。取。の。貢。糸。小。眼。を。瞬。し
 言。を。荒。ら。け。責。虐。け。て。執。掠。し。を。悪。し。く。と。ら。ひ。小。因果。の。免。れ。に。

今日滅亡。い。つ。ら。い。さ。も。ら。ら。し。ま。す。其。く。打。や。擲。め。り。と。よ。む。り。り。
 鋤。鍬。鎌。鉄。の。た。ぐ。ひ。の。農。具。を。我。れ。も。と。も。く。打。め。り。て。無。二。無。三。小
 ろ。り。や。り。て。い。ま。安。方。今。止。し。と。得。ど。手。小。の。る。小。ま。つ。せ。め。つ。て。擲。め
 つ。つ。て。前。あ。る。泥。沼。小。投。入。け。り。ふ。ぞ。泥。は。た。く。死。し。る。人。の。泥。く。り。り
 こ。ま。れ。さ。り。ま。ふ。あ。り。て。兩。足。む。り。り。え。の。も。わ。り。半。身。泥。小。流。り。て
 ろ。ひ。の。り。く。も。わ。り。それ。や。田。鼠。鶉。に。化。さ。る。時。の。と。が。小。の。る。む。ん。の。曳。尾
 の。龜。の。た。と。く。小。た。が。ひ。欲。小。亡。る。か。ら。あ。る。べ。い。残。る。者。も。な。か。り。り。と。ま。ふ
 打。う。る。瓜。箇。く。相。手。小。せ。ん。も。い。ま。つ。る。こ。ろ。や。さ。ひ。う。ん。傍。小。わ。り
 ける。封。識。札。を。引。抜。力。小。ま。つ。せ。難。立。た。れ。ば。何。れ。の。り。り。と。な。ま。つ。る。こ。ろ
 ろ。り。ぐ。小。逃。失。ぬ。安。方。の。素。好。も。戦。小。め。り。が。れ。が。逃。る。瓜。幸。あ。り。て
 追。行。む。杞。小。つ。つ。の。り。る。文。字。を。讀。む。と。本。街。の。案内。を。知。り。て

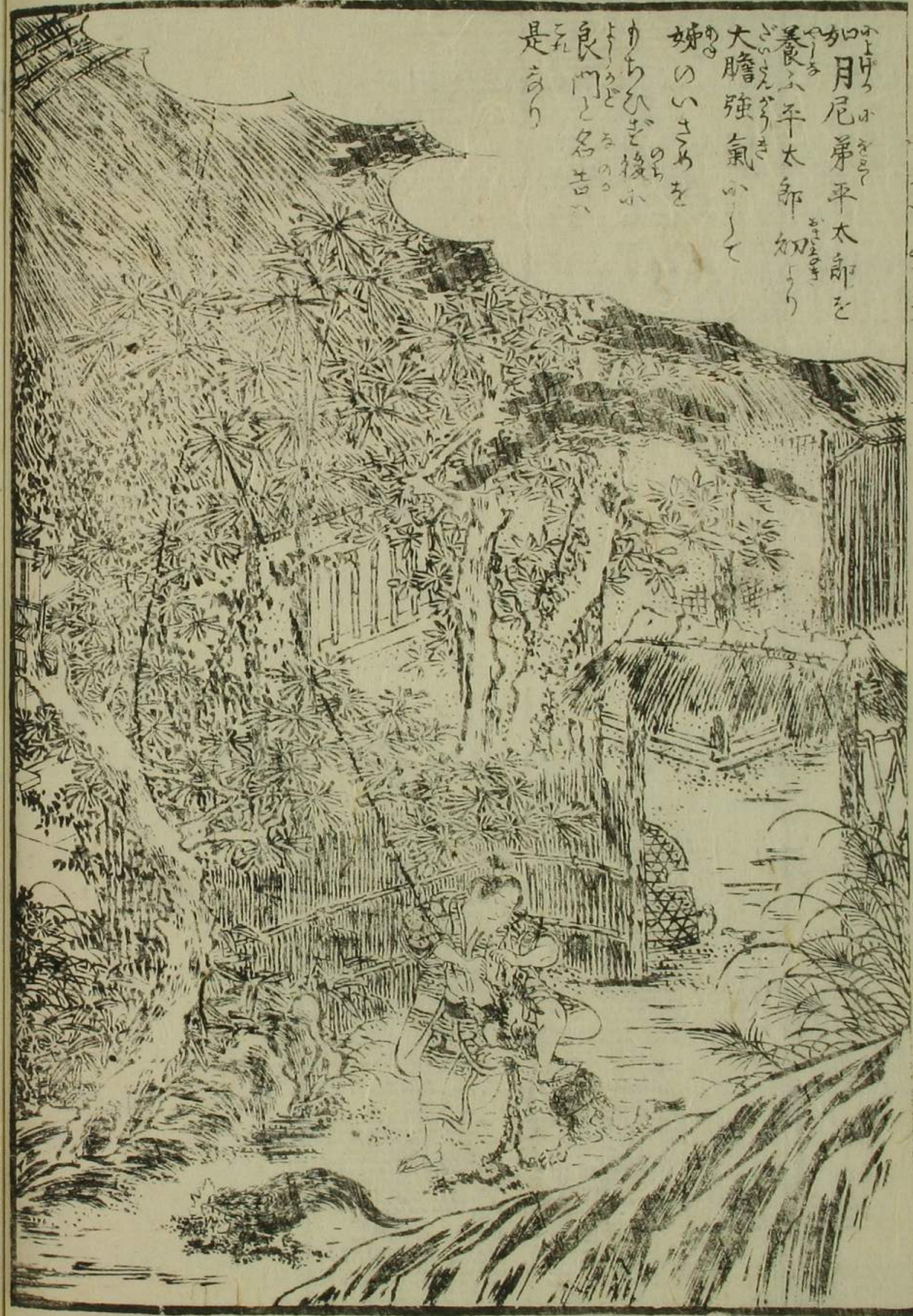


将門のむすめ一六歳
惠日寺にて剃髪
亡父の菩提をたも
つる
法名
如月尼と
す

善知卷二



善矢巻



加月尼弟平太郎を
 養ふ平太郎知より
 大膽強氣いして
 姉のいさをを
 かりひき後ふ
 良門と名さへ
 是なり

善矢巻

十四

印をうけたり。若君誕生のしやいなや。かの妾婦の親里へ行く。小妾の男子を産てその小妾より其男子の襦袢のうらより何方かつらじ。そのうち妾の親も死し跡も絶らる。里人のかつらとめて力か落し。若君のゆへとぐぬべき手がやもあけむのこづかふ打とる。そのゆのこふか。武藏五郎が遺言とむりくともる。を愁ひに。外が濱へ控へて。夏をまどりし冬も考。歎をとりて世渡し。まどく年月をおろりぬ。ある小妻錦木男子を産。名を千代童といひて。今年七才ふりたる。一日高所の郡司より急番の雉子を打。出せよと命せられ。庄屋に某ありてその夏を侍ける。郡司乃命。それ等閑に志がく。弓矢を携て暮方より山へぬ。翌朝未明。小庄屋又あり。錦木ふひひ善知い。まど山よりく。郡司の御用

のきまれば。若取得ざる。其も共小迷惑も。夏ありといひて。安心せざる。様子あり。錦木こえて。まどく番取得の氣づく。ひひ。むつを待ゆへといふ。うち。果して安方。雌雄の雉子を提て。畝米をば。庄屋を。今。錦木。本。後。より。一番。取。り。と。い。ひ。が。目。お。え。る。う。ら。ひ。お。づ。ら。く。あ。ひ。ふ。その。こ。ろ。は。ふ。し。の。で。ま。を。あ。り。價。あ。り。て。郡。司。よ。り。く。る。ら。じ。片。時。も。く。や。く。さ。の。の。が。ん。ら。て。考。と。携。て。い。そ。が。い。く。ま。り。ぬ。その。跡。あ。て。安。方。妻。お。ひ。ひ。ひ。そ。ま。我。考。を。得。る。得。る。と。先。づ。ら。て。お。へ。こ。し。は。は。ま。う。る。を。た。く。ふ。番。得。る。あ。ん。ど。胡。乱。あ。る。と。ぬ。ひ。ひ。へ。公。得。と。と。の。へ。錦。木。濱。を。く。く。と。お。じ。だ。く。ふ。ま。る。る。の。こ。づ。ら。て。ま。ど。く。ハ。ヤ。セ。し。と。い。ふ。安。方。い。ふ。う。り。それ。い。う。あ。る。ま。ま。ど。く。と。う。さ。ね。て。ま。ひ。ひ。る。お。ま。錦。木。や。く。お。ま。い。ひ。が。れ。が。其。ゆ。ふ。ゆ。り。お。ん。だ。も。殺。生。の。ま。ま。ど。ま。業。こ。ま。り。つ



平太郎筑波山



平太郎筑波山
入て異人止め
蝦蟇の術を
さるる

もよ。つぐ。ふ。お。い。り。知。れ。ぢ。も。甚。危。き。沖。身。あり。我。一。命。か。へ
ても。若。君。の。沖。身。の。う。と。安。ん。ど。づ。と。武。藏。五。郎。小。哲。一。詞。い。う。で。う
変。じ。べ。い。幸。頂。日。少。の。手。が。ま。と。得。れ。ば。我。急。小。旅。返。して。ゆ。ゆ
へ。を。た。づ。の。武。藏。五。郎。が。遺。言。の。ご。う。く。大。政。官。の。印。と。携。て。都。小。上。を。
若。君。の。御。助。命。を。願。て。剃。髪。を。と。め。キ。其。後。我。等。夫。婦。も
さ。ゆ。と。り。て。ま。が。く。仏。の。つ。ま。べ。今。こ。り。殺。生。と。や。し。證。し。ん。え。よ。と。て。
引。矢。と。ら。り。て。折。を。死。と。ま。さ。ま。の。間。留。ま。せ。よ。若。君。小。つ。の
あ。く。べ。た。ら。小。吉。左。衛。門。と。ま。り。む。い。と。て。俄。小。旅。の。具。と。ら。の。官。印
と。首。か。う。て。飛。足。の。ま。む。妻。い。と。ま。小。別。を。お。し。片。時。も。や。う。り
来。ま。す。と。い。ひ。て。涙。さ。し。く。い。れ。ば。千。代。童。の。安。方。が。旅。衣。の。袖。小。ま。り。り。
し。ま。と。ま。ト。こ。て。ま。ま。こ。け。ふ。矢。猛。心。の。安。方。も。子。小。ひ。ま。ら。れ。て。二。度。こ。り。立。

り。ら。り。ん。殘。し。て。出。ま。き。り。う。が。これ。と。一。世。の。け。ん。と。後。あ。ど。お。ひ。ち。ん。れ。ら。う

白川の關

第二條

こ。も。時。光。過。や。ま。く。日。月。校。の。ご。く。ま。ら。り。て。平。を。部。已。小。十五。才。あり
け。が。ご。う。剃。髪。を。ま。き。志。ん。え。ざ。れ。ば。如。月。尼。益。怒。て。より。く。出家。の
功。德。を。説。殺。生。の。惡。業。を。戒。る。と。り。へ。も。耳。あ。も。ま。入。と。山。野。小。鹿。猿。を
追。ま。り。り。て。劍。法。を。ま。ま。び。諸。鳥。狐。射。り。て。勢。と。試。と。或。ハ。牧。駒。小
繩。守。綱。く。け。て。高。山。廣。野。と。し。せ。わ。ら。り。已。小。切。瑤。琢。磨。して。其。才。を。徴。し。
專。守。武。藝。を。一。切。し。り。り。と。て。一。日。塊。波。山。の。奥。深。く。い。り。入。て。巽。死。た。づ。の
う。う。小。愈。む。い。の。峯。より。虹。の。如。き。白。氣。く。ち。の。わり。け。と。い。平。を。部
これ。が。怪。と。岩。石。を。つ。つ。小。荆棘。と。踏。分。から。う。ど。て。其。所。小。到。り。て
び。る。小。岩。窟。の。裏。の。暗。さ。所。小。一。對。の。明。鏡。を。か。け。る。ま。ら。が。と。死。光。を

物のり益怪之眼をさざわてうへえれば。五六むらりの大蝦蟇あり。かの光り物の両眼のかけやうてむりゆり。大なるは瓜ひり。まて白氣を吐形勢おもしろいとも思あり。卒を却素大膽強氣の者なれ。携てつら小捕箭をつぐへ蝦蟇のむまさう瓜的ふまきりくとひまこをかりて。己ふとまさんぞうつふ忽雲霧ひきまかりて。蝦蟇の姿をうじし。岩石樹木鳴動し。五体もびれまきりて。尻居ふ嚏と倒ぶらり。夢のころちとてがり。とびしてやうく人ぞちつま。起よりてえれば。かの大蝦蟇化して白頭の異人とあり。岩のまな尻うけ。手をあげて卒を却とはし。まわく。平を却。され九人あつる。ほととひつ。をうとて。跪まひ。こば異人のひけるやう。我白氣を吐し。汝をこふ。まねうんあり。我の毛三千歳をあり。うら蝦蟇の精霊あり。我天竺蝦蟇仙よりつてつり。

神変不思議の術のりて。鬼神を役し。悪獸毒虫をつらひ。雲霧風雨を起し。飛行自在。うづふのまあり。ゆゑふ自肉芝仙と号を。ちうさうい。岩窟に住し。汝小まもまもえんがあり。其ゆゑいんとるれ。我かひて佛法王法を亡し。此土を魔界なるさんととふ。望ありとて。時つて。ぼて。これまを打さぬ。今より我汝小かをとて。かひの望とて。まさんとあり。あり。汝はいま。汝が素姓と。知るは。じゆい。我語をて。まをへ。杵汝の人王五十代の帝。桓武天皇の子。葛原親王より五代。上總介高望の孫。王子と出て。遠うと。前將軍平良將の嫡男。滝口小次郎相馬の将門が。実子あり。亡父将門押して。帝位おのやんと。隠謀をくらふ。猛威を關八州ふ。あり。ひ。權勢破竹のごとく。あり。不幸時を得と。去る天慶三年二月十四日。田原藤太秀郷上平太貞盛が。みふ。其才か。一門從類。尽く亡失ぬ。汝が

千歳せんざいの蝦蟇かまの精せい
異人いじんふ化ふかして
平太へいた郎らうふ謀ぼう叛はんを
そめそめ妖術まじまじを以もつて
相馬さうま内裏うちらの
形勢かたちをえり

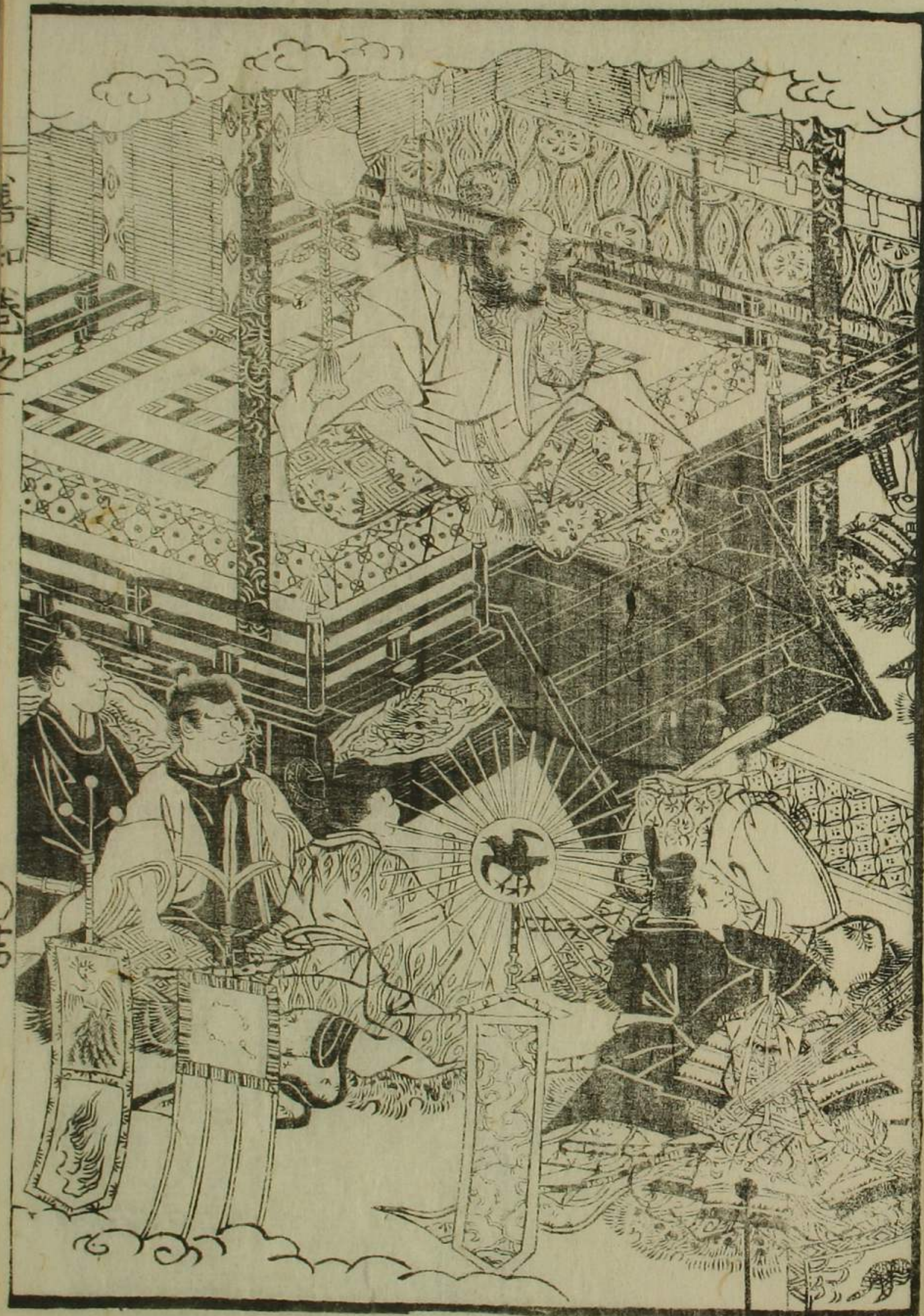


如月尼。仏法と信じて汝を出家せしめんと名ひ。且朝敵の胤どりみ。
 他にれきこん人とおされて。汝く素姓をかして。汝をこれと告ぐるら。が
 りのふいふいまで疑をこくべし。其證と人をべし。つひて。平不智劍の
 印とむらびて。檀中の中にて。虚空の氣と吞。咒文をさす。つとひく。か
 つの草むのうらより。一ひきの蟾蜍。一ひきの觸躰をくらひて。飛出異人
 の膝の上におきて。りりの所をかかん。つらね。異人これをさうして。示して。い
 此のいこれ。将門が觸躰なり。此額に疵あり。則負盛が矢のめとあり。都
 ふのて。鼻首をさす。我のて術をりて。つらびひまき。汝試ふ。觸
 躰の血をこぎ。血をの證の骨髄をとるべし。汝貴族の胤どりて
 木石とさる。ふくらんこと。残念あり。むや。くらさ。い。おもひ。さ。や。このひて
 与へ。平を即押つて。ま。手ごや。指の血をさう。つて。觸躰をとる。く。小。

其は骨髄をとる。とりの忽觸躰の額より。一道の陰火。閃とくら。のがり。
 冷風と吹て。平を即が。牙う。ち。ふ。と。冷と。り。ね。平を即。奇異の。おもひ
 とは。さて。い。傳へ。将門。將軍の。我。父。お。て。お。り。け。う。と。れ。と。い。お。く。と。今。ま。と。て。い
 唯い。や。た。土。民。百姓。原の子。ある。う。と。お。ひ。ひ。い。れ。ん。人。不。立。交。る。あ。も。我。を。う。ん。臆
 して。侮。襲。押。し。この。無。念。さ。よ。正。き。王。孫。を。て。か。る。の。つ。ぶ。せ。た。姿。を。そ。口。に。け
 け。した。と。い。亡。父。朝。敵。あ。も。の。是。其。打。ら。る。奴。原。を。我。仇。よ。其。終。小。た。を。け
 かうん。こと。大丈夫の。所。為。あ。い。を。これ。を。お。う。て。打。さ。さ。る。は。是。非。も。あ。い。
 父。う。へ。さ。ぞ。や。草。の。陰。お。て。我。を。賊。甲。斐。ま。き。の。と。名。ひ。あ。ひ。つ。ん。我。今。より。
 大。儀。を。お。り。ひ。立。本。懐。を。そ。けて。修。羅。の。苦。惱。を。と。く。ひ。宿。根。の。苦。接。を。と。く。
 さ。せ。や。ん。と。觸。躰。お。い。う。ひ。活。さ。る。人。ふ。の。つ。み。ご。と。く。い。ひ。て。涙。を。と。り。く。と。お。じ
 け。さ。び。異。人。か。さ。ね。て。云。汝。が。其。猛。志。あ。る。を。さ。ら。う。ら。る。ゆ。急。かく。相。見。こ。と。ん。

のりめ。我術をりつて将門が宮建。相馬内裏の廣大なる形勢と見え
 遙か流き谷底より。其くさる白雲の如く。須臾の間ふらりて眼前の
 大内裏の形勢とあり。つゞね。其さるいかにとるれば南北三十六町
 東西二十町ありて四方ふ二十二の門あり。東の陽明待賢郁芳門。南
 の養福朱雀皇嘉門。西の談天藻壁殷富門。北の安嘉偉鑿
 達智門。紫震清涼温明殿。日花月花の両門。陳坐軒廊。左右の掖。南
 殿の階下。右の橘。左の櫻。若かり。中央の鳥の旗と立。左の日の
 旗。青龍。朱雀の旗。右の月の旗。玄武。白虎の旗。丹の暉。として風ふるびき
 日小映ど。其外七十一の前殿。三十六の後宮。鳳の薨虹の梁雲ふきびぬ。
 造あへるる宮殿樓閣。尽あられけし。恰も秦の咸陽

宮と目前ふるるが如し。やのりて當音。うきまき。文武の百官次第。小
 叅内。其く。将門の舎弟。御厨三郎将頼。同大葦原四郎
 将平。同将為。同将武。常羽御厩。別當多治経明。藤原玄茂。武藏
 權守真世。文屋好兼。等の衣冠とつけ。位ふりて殿上階下。下は座
 して。平を部。八尾等の人の面をも。あつさりけし。異人。さ
 り。ひさしてその姓名。必とへけり。さて殿頭官。も出て。正面の玉筥。廉と
 捲上。とるれば。臨御の粧ひ。うかど。して。哀龍の御衣。若大違ふ。さ
 面の朱。をさ。なる。睦逆。小割のわり。鬘。左右。生け。高御座
 小存。只摩。首羅王の。平親王の。合戦の。具説。端
 あり。形勢。あり。か。叛逆の評議。及び。異見。區。合戦の。必



其二



言知卷二

十三

づれ善哉。我汝小蝦蟇の術と仰んよかひて其觸躰のうらふこち
おきくつりは術と仰て味方を集めてこそとさへ。汝が姉は企と云いて
一度坊と云へけれども。それも我は術を施さるべし。忽ち心志をかへし
うして共小力と合とせし。其責は心安んぎよとて印とむとひ咒文派
と云ふる仕方と。細やう小教て後。あつてびひひける。當時天下小武將おや
といへり。口にてこいさる頼光あり。彼武徳と云へるる小家臣四天王の
輩。勇氣猛烈なるれば。容易ふらぶまがじ。まうれども我彼等と一なやは
憚と云き計ありて。逆の峯とめまぎて。茨木くとよからしけれ。大太
たうりのかきしき。鬼黒雲ふみよじて花下り。岩窟の前小跪ぐ又涼
谷底と臨て山越まゝとけとよぐまければ。宜七尺むりの土蜘蛛眼鏡の
ごしく口ハ炎と吐がごとく。千とぢの糸と牙ふまゝひする。やがて此おとひ

いでし。異人先惡鬼小ひらひ。汝ハ養女と愛して。都小つとら。一条堀川
の戻橋おたご。浪辺源次細と拙く来る。つとひ。土蜘蛛と顧て。汝
ハ葛城山おとつとつり。頼光おつきと瘡疾とやはり。一命と断
へ。我もおとより都小をけり。術と施して諸人の心とまゝ。さん先汝
等のうらむ。わけと命。鬼ハ愛して。齡北斗の貴なる。女とかり。
紅梅の町。小守おとて。佩帯の袖小経と持り。蜘蛛の化して一箇の大法師と
あり。十條の繩とさして。共小雲小ふ。とて。飛去り。異人そのあ
と見え。打りて。ふり。ひけ。平を即ハ其術の妙さ。を感
て。信服を。異人い。汝大儀と云ひ。立る。片時も猶豫さへ
と。諸國をめぐりて。味方をあり。我汝がかけ。ふ。ひ
かと合を。後日再會の時。あら。たり。ち。渠

口説

七六

蝦蟇の術
瓜の
鬼の
土の
神を
授け



山
石
の
洞
窟

〇
七
二



山
石
の
洞
窟

〇
七
二

ええとありおたり。平太即益奇異のそひとはし。マの髑髏と押の
き懐りして。つひ小山とくらぬ

○案る小抱朴子曰。蟾蜍千歳とれ。頭上小角あり。腹の下丹書あり。
名づけて肉芝と云。能山精と食ふ。人得てこれと食。仙術家小取用
べ。以て霧と起し。雨と祈り。兵と辟。自縛と解。云々。世小蝦蟇の
術とりぬ。是乎。又冷斎夜話小。中貴揚哉と云者。大なる蝦蟇小。
牙と交トする。莫と記せり。隋書。獨孤陀が傳小。陀が家の婢。女徐
阿尼とつる者。猫鬼とつる術と得る事と記せり。猫とつる術
ものれば。蝦蟇の術もあれとつるべし。四國の大神も此なるひあり

安積山

第四條

此日如月尼庵室あり。平太即今如より菴と出ていまだ眠らされ。

又も殺生小ゆきわたり。うたふの考のそりわし愁ひつ。常香とりりて
居る折しも。平太即弓矢と携てくる来つ。尼公のまはとくしり
てつひゆるい。かめて亡父の素姓と云侍をこつども。治つて語りか
はしりしが。今日とくども父は天慶小亡むひ。将門將軍ありしと
たり。小侍りね。何とてささるりかじゆひ。どやとつひくれは。如月
尼公不驚た。色なきくせと。何人があつひつひゆるど。汝をれを
せんをばる。今ハ実とわたり。せせん。亡父のたつぐの事と云ひ立
敵とありゆひ。つひ小誅せしむひぬ。其時ハ汝いま。胎内小ありしが。
汝と産し。妻の親。情あく。斬敵の子なりと。襁褓のらちより。我方へ
おくりぬ。ゆゑ。さびふん瓜つるひて。育つる。我ハ十六才の年
父の後世の悲つ。さふかる。姿とありぬ。汝ハ十五才あるばんふも

より取出して押さうと云れば。金銀と以て日月の像と打つけし錦の旗あり。平を却とらりながら。疾び。旗のうらふ。婿上力と云ふ。本懐をどげんと疑ひは。かみい。吉日ぞ。兄弟共小い。又善知安方。平を却。始終の様子と。此所より。先程より。枝折戸の外。戸と押ひ。内。平を却。汝何奴。奥州外。本名と。折め。時来。某先程より。内外。弟。遺言。大政官の印。朝廷。若君の助命。乞。平を却。その言の終。何。汝大政官の印。持来。そや。それ。我望。無益の多言。吐。安方。官印。持来。君の助命。願。持来。伊企の用。忠義。非望。

又おがえ。安方。おひ。對面。心中。彼折め。時来。某先程より。内外。弟。遺言。大政官の印。朝廷。若君の助命。乞。平を却。その言の終。何。汝大政官の印。持来。そや。それ。我望。無益の多言。吐。安方。官印。持来。君の助命。願。持来。伊企の用。忠義。非望。



如月
 厄
 故術
 悪意
 謀叛
 兄弟
 うそ
 安方
 自殺



善知

唯菩提の乃と行ふと。詞と尽し理と結して諫うもいと苦しけりて。
 うや息もくもぐりあり。折しも後山の方小草刈童の吹とくむみや
 笛の音風ふりれてかたふきこえい。哀とくふけり。如月尼いうれる
 面色みて。やそれ安方よ。勘当の牙をも憚ど。人も仗さぬ理とき。仇
 る。源家と称養して。我輩と誹謗。銳氣とくどく。奈奇怪のま
 そわり。平を却よ。や彼奴が頭とくめて。軍神の血祭せりと下知
 とふぞ。平を却とくえゆといひ。氷とく刀とめけて。安方が
 首とくつくと打おとすと。憐むづい。義士南柯の夢と醒とせね。
 如月尼くぐり。開伽桶の水とくめて平を即が血刀ふそぎ。縋
 帽子とくつておしぬぐい。汝が平の裏天暗あり。かくて斧鉞とく
 ちむく不足とくしと。稱養とれば。平を即い。其今より祖父良將

又將門の両字とくつ。相馬を即良門と名告べ。さふ立を吉日う
 片時も猶豫とくど。幸する安方が旅装束とれとて。次安とく
 これよりも。旅立べ。手ぐや。安方う衣服とくめて。我が
 おやべ。如月尼一袋の金とく。我から企の心なく。高野山へ詞堂
 金おおさめんと。なくりへかき。は金子。づぐらなれども。尚分の路用
 おせよとく。あふまば。平を即押し。某諸國とわたり。蝦蟇の術と
 以て味方とる。官印とくつて。軍勢と催促。義兵とわたり。時
 のく。ゆむらひとく。先とれま。は巻中おめく。お
 せよ。心。人おささる。あふま。やあんの。とる。立ゆんと
 ころ。所。忠義お凝。安方が。首。軀。おまわ。背後より平を即
 が腰。おめ。つ。ひき。平を即。顧。執念。ぬ。奴。く。足

